

## 第一節 担任道 くこれぞ早人の進む道く

### 教師もいろいろ

担任とはどういうものかと思われている人に少し書いてみよう。担任を辞書で引くと、次のように書いてある。学級などを、その責任者として受け持つこと。また、その人。つまりクラス責任者と言える。

私は教諭として、三十六年間ずっと担任であったことを誇りに思ってる。担任の持ち方もいろいろあって、現在は二人担任制をとる学校も多い。これはクラスを二人の担任で持つという制度で、二人の関係は対等である。学校によっては、一クラスを完全に二十人と二十人に分けて担任を持つ場合もあるという。私自身は少し疑問に思うのだが。私としては一つのクラスなのだから、生徒指導や進路指導、クラス運営は二人で協力して行えば良いという考え方である。

また、私が若い頃は担任とは実質一人であった。正担任と副担任という呼び方をしている。担任業務はほとんど正担任がしていた。もちろん私も正担任として頑張っていた。副担任の人

もクラスのことについて何も言わなかったので、自分が好きなようにできたので、それはそれで良かった。

ところで、高校教師とひと言で言っても、いろいろなタイプがある。当り前のことだが、人によって教師になりたいと思っただ理由もさまざまである。私も長い間教職にあるので、様々なタイプを見てきた。教師にとって一番力を入れたい、情熱を燃やしたい所は、人により異なる。ここでは、様々なタイプを自分なりの分析を入れて書いてみたい。

最初に部活動に情熱をもって指導している人である。運動部でも文化部でも、何か自分が指導できる部活の顧問となり、生徒と共に汗を流し、部の指導こそ生きがいというタイプである。私もそういう人をたくさん知っている。正直に言って羨ましい気持ちである。部活動における教師と生徒の人間関係は、一生を通じてとても大きいものがある。部の顧問として地区大会、県大会、全国大会へと部員を導くというストーリーは、教師にとって大きな魅力であることは間違いない。

私は高校時代に部活動に入っておらず、教師になっての負い目となっていた。これから教師になろうとする若い世代の人に言いたい。特に高校教師になりたい人は、必ず高校時代に何か部活動に入って欲しい。できれば教師になって、その部活の指導ができれば申し分ない。もち

ろん、小学校や中学校の教師をめざす人にも同様のことが言えるので、部活動を頑張つて欲しい。

次に教科指導や担任としての指導力もあり、学校内の校務分掌について高い能力を持っているタイプである。校務分掌もいろいろあるが、教務課を例としてあげてみる。その業務は時間割の作成から高校入試やカリキュラム、各行事など多方面にわたる。文書作成や県への報告も多い。教師の中にも事務能力が高い人も多い。ミスが許されない仕事であるので、責任も重い。また進路課も同様のことが言える。とにかく、今の事務仕事はすべてパソコンでの作業となる。私は緑内障ということもあるが、本質的に事務処理は苦手だから、このタイプになることも無理である。

また教育現場で教師をやっている人の中には、教育センターとか県教育委員会へ入る人もいる。先生を指導する立場になるのである。行政へ出た人は、将来管理職になる人もいるし、校内で主幹教諭となる人も管理職候補である。

管理職に全く興味がない私には関係はないが、将来管理職になりたい人は、二十代から意識して、校内の校務分掌の仕事を正確に、しかも早く済ませるよう努力してもらいたい。管理職への道も厳しいのである。四十代後半からは、特に大病にならないことも大切である。どんな仕事も、健康でなくてはできないからである。

## 生涯一担任を貫いて

なぜ、私は担任にこだわり続けたのかという点である。私は部活動で指導できるものが無いし、事務的な仕事も大の苦手である。私が教師を目指した理由は、世界史が好きで、一人でも多く世界史が好きな生徒を増やすことが目標だったことと、クラス担任を持ち、担任として全力を尽し、生徒のために奉仕しようと思ったからである。

そんな私も三十代前半に井原高校で進路課長補佐になった時には、当時の管理職から、将来は教頭や校長を目指したらとアドバイスされたことがあった。学校の中で、若いのに責任が重い仕事を与えられて、やる気モード全開となっていた。進路課長補佐でもあり、学年の進路課キヤップも兼ね、五十人近いクラスの担任でもあった。

まだ若かったから、朝の七時三十分に登校し、夜は十九時三十分まで毎日働いていて、やりがいも感じていた。そんな時に、三十二歳で緑内障を発症したのである。それからすでに三十年、何とか緑内障とうまくつき合ってきて、まだ目もなんとか見えている。ただ視神経もかなり損傷している。左目は二度手術を行い、なんとか進行は止まっているが、視野はかなり狭くなっ

ているのが現実である。

母校の笠岡高校に勤めていた四十代後半に、自分も一度だけ学年主任をやってみたく、母校のために貢献したいと思い、先輩教諭の後押しもあり、校長室に勇気を出して直訴したことがあったが、校長からは、パソコンが使えないから学年主任は無理だろうと言われた。やっぱりパソコンなのか？と予想外の答えに啞然として、苦笑してしまった。

学年主任を決める時には、管理職が本人に事前に打診して、了承を得て決定となる。私は今まで一度も打診されたことはない。

さて、以上のようなことも昔話となったが、私は本来の教師像を見失ってはいけないと思い、もうぶれないことにした。自分は、担任として退職の日まで勤めることを決めた。特にやりがいがあるのが、高三の担任である。普通科の進学校に長くいると、やはり本人の将来の進路を決定する、高校三年の時の担任を持ちたいと思う。本人や保護者とも十分に話を聞きながら、自分の経験が役に立つのだから、やりがい一〇〇%MAXである。

## 「生徒が主役」の心構え

### 担任の心構え

「担任道」とは、私の造語である。学校の中においてクラス担任としての責務は重いものである。担任するにあたり、教師たるもの責任感を持ち、また使命感を持って、与えられたクラスの担任業務を行うべきなのである。たとえば、私は今年は担任がないから楽でいいなど思っている人は、反省すべきなのである。なぜ、自分は担任を持たせてもらえないのかと考えるべきなのだ。

担任道とは何か。それは担任がそのクラスについてどれだけ本気になり、情熱を持って生徒や保護者の方に奉仕し、尽くせるかという担任としての心構えのことである。

その道は険しくて易しくはないかもしれないが、生徒のために頑張るのが、教師なのである。我々の職場では、クラスのためや教科指導にどれだけ時間をかけても、その結果は目には見えない。うがった言い方をしたら、最低限のことをするだけでも給料は出る。